

マイナー映画の楽しみ

平成 28 年 11 月

沼尾 利郎



「ラスト・ショー」(1971 米)

1 映画オタクだった頃

学生時代から「マイナー映画」が好きでした。商業的にはヒットしなくても、「シブくて味のある映画」を好んで観てきました。ハリウッド製作の超大作や話題作も一応は観ますが、あまり心に残りません。世間ではさほど評判にならなくても、その時の自分の心情に合った作品に出会うと、「掘り出し物を見つけた骨董好き」のように、何か得した気分になるのです。これまで最もよく映画を観たのは、東京で大学浪人をしていた時期でした(1974-75年)。地方出身の浪人生にとって、孤独な都会の生活の中で自分の知らない世界に没頭できるのは、大学受験という現実から逃避する手頃な手段だったのです。「映画なんか観ている場合ではない！」と思うと余計に観たくなるのは、試験前になるとなぜか本や漫画が読みたくなるのと同じですね。

「マイナー映画」には2種類あり、1つはマイナーであることが宿命づけられた出来栄えのものです(世間ではこれを「駄作」とも言います)。「確かにこれはヒットしないわ…」と観客が妙に納得できる(ダメさがわかる)ものです。もう1つはテーマが地味で一般受けこそしないものの、その内容は決して悪くない作品です。映画通の人たちは後者に詳しいと思いますが私は単なる映画好きであり、どちらのマイナーも好きで「はずれもまた良し」というスタンスでした。



新宿 ATG 蜷座 (さそりざ)

2 今は無き名画座

当時よく通った映画館は池袋文芸座・文芸地下、渋谷東急文化、飯田橋佳作座などの名画座であり、土曜の夜には「オールナイト 5 本立て」などというプログラムにも出かけました（今思えばよく観たものです）。都心にある名画座だけでなく、上板東映や高円寺・下北沢などへも創刊まもない「ぴあ」を片手に遠征しました。古い邦画から新着洋画まで、ミュージカルから社会派・戦争ものまで何でも観ました。何を観てもその頃の自分にとっては新鮮で面白く、「こんな世界があったのか…」「そんな時代があったんだ…」と感ずることばかりでした。

名画座の中で特に思い出深いのは、新宿 ATG（アートシアターギルド）蜷座（さそりざ）という、ビルの地下にあり 20～30 人しか入れないほど狭い映画館でした。ここではフランス・ヌーベルバーグ時代の作品（ジャン・リュック・ゴダールやフランソワ・トリュフォーなど）や、60～70 年代のアメリカ映画、そして邦画では大島渚や若松孝二などの政治的映画や鈴木清順・寺山修司など独自の世界観を持つ個性派監督の作品がよく上映されており、観客もどこか屈折して怖そうな（アブナイ）人達ばかりでした。世界の動きや現代史について何も知らなかった 18 歳の自分にとっては、すべてが驚きの連続だったのです。

今ではこれら名画座のほとんどはなくなりましたが、あの時代にあの空気感の中で観た多くのマイナー映画は、私にとって貴重な財産となっています。現在ではシネコンがあり、古い映画や見逃した名画は自宅でいくらでも DVD で観られますが、あの時の「情感」は決して再現（再生）できないものです（中高年のノスタルジーですね）。



「ラスト・ショー」(1971 米)

3 愛しのマイナーたち

「ラスト・ショー」(1971 米)はテキサスの小さな街(1950年代)を舞台に、多感な青春の夢とその終わりをテーマとしながら、古きアメリカの終焉も描き出している作品です。時代に取り残され寂れていく街の姿、閉塞感と葛藤する卒業間近の高校生、古き良き西部開拓時代が忘れられない大人たちなど、スモールタウンに生きる人々の姿や交流が淡々と描かれており、「アメリカン・グラフィティ」(1973)や「ギルバート・グレイプ」(1993)の源流がこの作品にはあります。原題の「The Last Picture Show」とは閉館する映画館の最終上映のことであり、消え去る運命の地方の映画館が象徴的に表現されていました。商業的にはヒットしませんでした。第44回アカデミー賞(1972年)の助演女優賞と助演男優賞を受賞しているので、マイナーとは言えないかもしれませんね。

一方、邦画では奇作・快作・怪作(?)を数多く観ましたが、破天荒な青春を突き抜けた爽快感で描いた「けんかえれじい」(1966 日活)が妙に心に残っています。この映画は昭和初期の旧制中学を舞台に、「バンカラ」と呼ばれた少年たちがケンカに明け暮れる日々を描いた痛快アクションであり、おおらかなユーモアや青春のリリシズム(抒情性)も感じさせます。監督の鈴木清順は新鮮な色彩感覚と独自の映像表現により、「清順美学」と呼ばれるほど一部に熱狂的なファンを持つ鬼才として有名でした。本作品は予算不足のためにモノクロとなったそうですが、かえって昭和初期という時代の雰囲気がよく出ており、北一輝と遭遇した主人公が「もっと大きなケンカをしに行く」と決意して、動乱(二・二六事件)の東京へ向かう列車に飛び乗るシーンが今でも目に浮かびます。プログラム・ピクチャー(上映スケジュールを埋めるために量産された低予算の映画)全盛の時代にあって、「訳の分からん映画を作る奴」と社長を激怒させ会社をクビになった清順監督でしたが、その後の活躍や高い評価をみれば「時代が清順に追いついた」ということなのでしょう。



「けんかえれじい」(1966 日活)

4 映画の効用

最近になり、再び映画を観るようになりました。仕事で疲れたときには「何でもいいから別の世界に浸りたい」という気分になり、忙しい日々が続くと心が乾いたような気がして、泣いたり笑ったりという感情を発散したくなるのです。涙を流すことで心が浄化・潤化され、笑うことで体の細胞が活性化されるのかもしれませんが。映画の主人公に共感するのは、患者さんに共感するのと同じなのではないでしょうか？ 医療の世界には「ナラティブ・メディスン」という言葉がありますが、「ナラティブ」とは「物語、語り」という意味であり、患者さんの語る言葉に医療者がどれだけ深く共感できるかを重視し、そのことで医療の質を向上させていくという考え方が「ナラティブ・メディスン」です。医療面接やメンタルヘルスの視点からも、映画の効用はあるように思います。

それにしてもあの頃は どうしてあんなに映画に夢中だったのか、今でもよくわかりません。若いときに感動した作品をもう一度観たい気もしますが、いま観て何も感じなかったら自分の感受性が枯渇したようであり、恐くてとても観れません。「将来に対する漠然とした不安」の中で観た多くの映画の記憶は、微妙に揺れ動いた18歳の少年の心の投影だったようです。